

狭間先生とのご縁をいただいて

福祉と健康コースコース長 山 縣 文 治

狭間先生と私は、3つの縁で結ばれている。

1つめの縁は、広島県出身ということである。出身地は異なるので、直接の交流はなかったが、なぜか同じ匂いを感じるのである。年を重ねるとなごさらであるが、何某かの共通点があると、つつい親しみを感じるものである。

2つめの縁は、大阪市立大学で研究室を同じくしたということである。狭間先生は、社会人、専業主婦を経て、大学院に進学されている。前期博士課程は大阪女子大学であったが、後期博士課程は大阪市立大学の生活科学研究科の社会福祉学講座を選択された。当時の大阪市立大学には、緩やかな講座制が残っており、私は当時そこで助教授をしていた。狭間先生は、ソーシャルワークを研究することを目的として進学されたが、そこで、ライフモデル、ストレングス視点、ナラティブアプローチなど、当時の最新のモデルをテーマとした研究と実践に取り組まれることになる。ソーシャルワークを専門としない私には、たまに行う先生とのディスカッションは大変興味深いものであった。先生は、その後、これらの研究を深められ、『社会福祉の援助観：ストレングス視点・社会構成主義・エンパワメント』（筒井書房 2001）、『ソーシャルワーク実践における社会資源の創出：つなぐことの論理』（関西大学出版部 2016）という2冊の単著を著されることになる。

3つめの縁は、ここ関西大学での出会いである。狭間先生は、人間健康学部開設に伴い、文学部から異動してこられていた。開設当初からの主要メンバーであり、竹内洋初代学部長の後、第2代学部長を務められた。私は、開設3年目の着任であり、ちょうど狭間先生が学部長の時期である。今でも、前記2つの縁のおかげで、浅才の私に救いの手を差し伸べていただいたのではないかと感謝している。研究室もすぐ隣で、先生の部屋は学生のみならず、現場の方々が頻繁に来室され、話し合いをしておられたのをよく覚えている。また、大学院については、文学研究科に所属のままであったが、実践現場の方々を院生として多く受け入れ、実践現場の質の向上に資するだけでなく、研究職に転職した方も少なくない。教育者としても多くの実績を残されたのである。

研究職としての期間は必ずしも長いわけではないが、以上のように、先生は、教育面でも研究面でも非常に大きな功績を残しておられる。このような先生に多くのご縁を頂けたことは、この上ない喜びであり、個人的にも関西大学としても感謝の至りである。

これからは、大学の公務を離れられることになるが、ゆっくりと研究を進められるとともに、次世代の実践家に優しくも厳しく寄り添う先生でありつづけていただきたい。

